
桃色の雲の空

黒之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色の雲の空

【Nコード】

N7782A

【作者名】

黒之

【あらすじ】

何処にでも居る普通の高校生神谷司狼。男子にも女子にも人気だが如何せん彼女が居ない。そんな状態でバイト尽くしと言う夏休みを迎えた。そんな中、司狼はある女性と出会う。下書き無しのぶつけ本番日記調ラブコメディ？

7月25日

俺は神谷司狼。

狼を続べるとか大層な名前だが、俺自身は普通の何処にでも居る高一だと思ってる。

早いもので夏休みに入ってからもう五日目だ。

中学時代の友達に塾、塾、塾。

塾とか家庭教師だとかはよく分からないけど、俺は商業系だから関係ないと思ってる。

だから高校の友達は何時でも遊べるかつつたらそうじゃない。

皆自分の彼女と遊んでやがる。

夏休みの思い出を作りたいんだと。

ケツ、薄情者！お前等なんかカラオケだとかに誘ってやんねえからな！

でも羨ましいな、彼女。俺も欲しい。

決して不細工って訳じゃないから（中高続いて

「シロちゃんももう少し何か有ればモテ顔なんだよね」

って女子に言われた。)

この夏休み中になんとか作ってみようと思う。

7月26日

今日は天気がよく、とても暑い。

家でじっとしてるのもなんだし、駅近くの盛り場に行くことにした。けど盛り場にゃ馬鹿そうなカップルしか居ねえ。

胸くそ悪い。帰るか。

これだから夏。特に夏休みは嫌いだ。

お前等他に行くところないのかよ!?

コンビニよってアイスでも食いながら帰るか。

俺小豆バー好きなんだよな。

とかまあ頭ン中で独り言言いながら小豆バー噛ってたんだ。そしたらさ、見つけた。

何がって? 聞く迄もないだろ、可愛い女の子だよ!

白いフリル付きのワンピースに薄いカーディガンてやつ? を着た女の子。

見たとこ年は俺と同じか俺より一こ二こ上な感じ。

顔が小さくて、目がぱっちり大きくて二重。

唇はサクランボみたいに朱くて、鼻はずっと高く通ってる。

殆ど化粧してねえの。

俺男だから化粧のことよく分かんねえけど、本当にうっすら。で艶々に光る黒くて長い髪の毛。

パツと見は大人しい感じの女の子。

完全に俺のタイプだった。絶対声かけなきゃ。そう思った。今を逃したらぜってえこんな可愛い娘に会えないからね。

幸い地図眺めてたから声を掛けるのは簡単だった。

俺は俺の高鳴る心臓の音を聞きながら声をかけた。

「地図なんか眺めてどうしたの? この辺だったら案内しようか」

「ホント? ここ誰も通らないから不安だったんだよね」

少し驚いたような、安心したような笑顔で言ってきた。

笑った顔もやっぱり可愛い。

鈴みたいによく透き通った声。

幸せだ！　　今なら死んでも良い！

俺は聞いた。

「どこ行くの？」

もう心臓バクバク。

学校じゃこんな可愛い娘居ないからさ。おまけに一目惚れだし。

「んーとね、風雲荘ってとこ。あたし今度からそこに住むんだけど、道に迷っちゃって。」

てへへ、と照れたように笑う女の子。

もう心臓が破裂するんじゃないか？ってぐらい早く動いてる。

暑い。熱い。目眩がしてきた。

風雲荘っておい！俺が住んでるアパートじゃん！

あまりの偶然に狼狽しつつ尋ねる。

「へ？風雲荘ってあのアパートの？」

「うん、そうだけど、どうしたの？」

不審そうに彼女が聞き返す。

俺の顔真っ赤だなとか思いながら

「えっと…俺もそこ住んでんだよね…」

と返す。

「え？本当!？」

目茶苦茶びっくりしてるみたいだ。

そらそうだ。こんな漫画みたいな展開、俺だってびっくりだ。

でも次の瞬間もっとびっくりした。

「うん、205号室に住んでんだけど」

「うっそ私206号室に入るの！」

な？　　びっくりだろ？

「お隣さんかー。私は小日向優雪！優しい雪って書いてゆうきだよ。宜しくね！」

飛びっきりの笑顔で自己紹介。マジ可愛い…

俺にも春、いや夏が来たか!?

「俺は神谷司狼。狼を司るって書いて司狼。宜しく。」

同じ様にして自己紹介を返す。どこの学校に通うんだろうか?とて
も気になった。

だから道すがら

「優雪ちゃんは何処の高校通うの? 明星女子とか?」
て聞いてみた。

すると彼女はうーん、と唸った。

んでまたまた予想外の答え。

「やっぱりそう見える?」

なにがだ?

「何が?」

「うーんとね、私もう出たんだ。高校。今二十歳」
ちよつとバツが悪そうに笑う。

「嘘ォ!?! 俺より四つも上?」

「うん。ホラ」

と、財布から免許証を出す。

写真の優雪ちゃんも可愛い。じゃなくてそこには確かに生年月日昭和62年と書いてあった。

もう何でも来い。俺はもう驚かねえぞ!

「へえー、そうなんだ。全然見えねえ」

「よく言われる。今は会社で経理やってるんだ。」

「お。俺商業行つてんだ。だからちいとわかるよ。」

とか雑談しながらアパートに着いた。今日は下見らしく、すぐに電
車で実家に帰るとのことだった。

見送った後、俺は幸せの絶頂に居た。

明日からは毎日が天国だ!とか考えながら。

7月27日

ーコンコンコン。

ドアのノックの音で目が覚めた。

枕元の時計を見る。

今日はバイトもないから目覚ましは鳴らない。

短針は11時を指していた。うわ、寝過ぎたよ。

未だ眠気の抜けない頭を抱えて、玄関に歩いていく。

「ったく、誰だよ」

鍵を開けて、ドアノブを捻ったら。

「やつほ♪シロ君、今起きたの？」

腰をかがめて上目遣いにこっちを見る。

襟空きブラウスからチラッと覗く白いブラがエロ可愛い。

「あ、優雪ちゃんお早よう。どうしたの？」

欠伸しながら聞いた。

「あー！ひどーい。せっかく引越し蕎麦持ってきたのにー」

彼女のカバンの中には確かに蕎麦セットが。

「あ、こりゃどうも」

茶目っ気に言って受け取ろうとすると、優雪ちゃんは意地悪そうに

そのセットを後ろに隠した。このアマ！

「一緒に食べない？シロ君」

…へ？

良いのですか！？思わず敬語になっちまった。

「駄目？」

うるっと目を潤ませる。ぐはあ！可愛い！抱き締めたい！

そんな煩惱を抑えつつなんとか

「いいよ」

とだけ言ったんだ。

「じゃ、お邪魔しまーす」

は？はあああ！？

「おおー。以外に綺麗な部屋だねえ」

「そりゃどうも。って言うか何で俺の部屋なんだ？」

すっごく不思議だ。嬉しいけど。

「えー、だってまだ荷物全部開いてないし。…若い乙女の部屋に入りたいの？」

……なぜそうなる。

「いや別にそういう訳じゃないんで。さらにそれ言うなら思春期の男子の部屋に入るあんた様はどうなのよ？」

うん、至極真つ当な意見を言えた。

でもやっぱり優雪ちゃん。手強い。

「別に良いじゃあないですかお兄さん。台所借りるね？あ、座ってねー」

あっさりスルー。この人の頭の中見てみたいな。どんななってんだろ？とか思いつつ座る。

「あら？あらあらあら？」

がさごそと台所を探る優雪ちゃん。

「どうしたの？」

「ここって、片手鍋しかないのね。うーん。…よし」

優雪ちゃんは自分のバッグを探ると、おもむろに財布を取り出した。んで俺に

「シロ君、両手鍋プレゼントするからこれで買ってきて」

って2千円を突き出した。

「はあ？なんでだよ。別に片手鍋でも良いじゃん」

って反論したんだけど、

「だめ！麺類はたっぷりのお湯で茹でなきゃ美味しくないの！」
だって。

結局買いに行ったんだ。

チャリンコで。四十分かけて。

普通のスーパージャ売ってないんだよね。

ホームセンターかダイ◯◯みたいな大型ショッピングセンターしか売ってねえんだ。

で、その両手鍋を籠に突っ込んで帰ったわけよ。嫌な予感がしたからできるだけ飛ばして。

そしたら予感的中。

優雪ちゃん俺のベッドの下探ってやがった。

「あー！やっぱり！何やってんだ！」

怒鳴ってみた。そしたらビクッて身体震わせて冷や汗かきながら

「お、お帰りー」
って言った。

「いやね、思春期の男の子の一人暮らしでしょ？なんかエッチな本とか無いかなあって」

「無・え・よ！大体ベッドの下なんて古典的な」

呆れた。こんなことする奴が本当に居たとは。

「えへへー。ごめん。でもお隣にこんな可愛いお姉さんが来たんだから別に要らないわよね」

マジですか。自分のこと可愛いって……いや実際可愛いんだが。

「はあ、もう勝手に探るなよ？はい両手鍋」

水9リットルは入りそうなでかい鍋を渡す。

「ああ、そうそううつかりしてた♪……ちっちゃいわね、まだ」

はあ？一人暮らしだったならそれでも十分だったのとか思いながら俺も台所に立った。

すげえ。かなりすげえ。

ぶっちゃけ優雪ちゃん見くびってた。

「ごめん優雪ちゃん。俺「どうせその辺のバカOLみたいに料理壊滅的に下手なんだろ？」と思ってた」

脱帽ですよ。被ってないけど。

「へへん。どう？それでも地元じゃ料理上手の優ちゃんに通ってたんだから♪」

納得。しきれないけどしとく。

だって今打ってんだよ？ソバ。

普通ソバセツトって言ったら半生か乾麺じゃない？

優雪ちゃんソバ粉から打ってるよ！

流石にソバ打ちできない俺はすみっこで葱刻んだりぐらいしか出来なかった。

んで、茹で上がったんだ。

そのソバの見た目の見事さと言ったらもう。独立して自分の店もてるよって位。

ちっこいテーブル挟んで座って同時に

「頂きます」

旨い。これ程旨いのは本格的なそば屋ぐらいでしか食ったことねえ。

「旨いねこれ」

とか言いながら都合5人前食った。俺3人前。優雪ちゃん2人前。んで二人してテレビとか見た。

六時ごろになって

「あー！そうだ、買い物行かなきゃ」

っていきなり。

「ごめんシロ君。買い物行ってそのまま帰るね」
って言ったから、

「あ、うん。じゃお休みー」

って言った。

「うん、また明日ね」

って言葉を残して俺の部屋を去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7782a/>

桃色の雲の空

2010年10月20日13時28分発行